

報



會

會 岳 山 本 日

45

月 四 年 十 和 昭

圖書展覽會の爲めに

松 方 三 郎

擬餌鉤つりや野鳥の本の著者として有名な——そしてより廣くは英國の名外相として識られた——故グレイ卿が會つて「讀書」についてこんなことを書いたことがある。『どんな人も讀書の趣味を會得する迄は本當に獨立を獲得したとはいふことが出来ない』と。グレイ卿の謂ふ意味は友達が居ないと淋しいとか、親兄弟と離れてゐては心細いとか云つてゐる間は人間はまだ他人様に依存してゐる譯で、本當に獨立人と呼ばれるに値しない。然し讀書の樂しみを識り、たつた一人でも本を友に裕に獨りを樂しむ術を知つた時人間は本當の獨立を獲得したものだといふ意味である。

グレイ卿式に云へば山岳人は餘程恵まれた人種に屬することは疑ふ餘地がない。自然を對象として生きてゐる以上、山岳人は、足腰の立つ間乃至は眼の見える間獨りを樂しむ術を見出すことに苦勞しないからだ。のみならず此の山岳人は讀書人として獨立性を獲得する機會を非常に豊富に與へられてゐる。山岳圖書展覽會の爲めに集められた品を一覽した丈けでも、我々は假令九十や百まで長生したとしても讀む本に困難を感じずる心配がないといふ安心は充分得られる。然も打眺めた所、學校の教

科書とは反對に、何邊繰返して讀んで見ても興趣盡きない種類のものが恐ろしく多い。一生の經驗の結果を投じたといふ程八釜しい著述ではなくとも、その時／＼には身心を打込んだ登攀であり、その登攀の忠實な記録であつて見れば、何等かの意味でその人の全人格が其處に表現せられてゐる譯であらうし、従つて幾度繰返して讀んでみても飽きないのであらう。フインチは『人類の受繼いだ遺産は大きい。山がそれだ』と云つてゐるが、彼の口調を借りて『人類の受繼いだ遺産は誠に大きい。山岳圖書がそれだ』と云ふことは決して無理な云ひ方ではない。

動物として山岳人が反芻類に屬することは此の度びの展覽會に出た幾つかの圖書を繰いて見れば直ちに了解出来る。山岳會の元祖の英國のアルバイン・クラブにしてもそれは山から歸つた後までも、その山を反芻することに異常な樂しみを見出した幾人かの山岳人が落合つて『では一緒に山物語りをしやうぢやないか』といった風な所から出来上つて來たことはアルバイン・クラブ創立當時の事情に明かである。我が日本山岳會にしても／＼は『山日記』出版の爲めに出来たのでもなければ、頻々たる遭難に奮起して組織されたものでもない。たゞ時期がおのづから變つて行つて何處の山岳會もその社會的地位が確立するに従つておのづから、その與へられた地位に相應しい社會的義務を負はざるを得なくなつたといふに過ぎない。

何れにしても此の山岳人たる反芻動物の仲間が最初に企てたものが、山岳談を目的とした仲間の間の集會である。次に企てたことが紀行文集の作成であつたことも、之また、内外その軌を一にする。要するに、山岳人は自らその山を反芻するに止らず、その反芻する材料をもつと永久的な形で保存しやうと考へた譯である。書かれたものは語られるものに比べれば或は幾分生氣に乏しいかも知れない。然し鑑詰である以上多少グイターミンを犠牲にすることは已むを得ない。こんなことをして我々の先輩は深山に自分達の反芻する食物を蓄積すると同時に、後から來る者に對して恐る可く無盡蔵な營養を遺してくれた譯だ。山岳圖書である以上探險の報告に類するものを勿論含まれる。然し、何れの公けの又は私の山岳圖書蒐集を見ても、その本當の髓をなすものが我々の先蹤者の物した登攀追想記であり、山を通しての人生談であることは争はれない。そして之こそは山岳會の或は山岳人の圖書蒐集を、地理學者の書庫や、珍本稀書蒐集家のそれと本質的に區別するものであり、山岳人にとつてはかけがへのない生命の源なのである。斯くして——幸福なことには——山岳人は自分自身の山を無限に反芻する樂しきを持つのみならず幾多の先蹤者の山を通しての人生經驗をも味ふことによつて、その樂しみを無限に擴張することが出来る。尤もかうやつてゐる内に反芻動物から昆蟲に轉化して本物の紙魚になつた山岳人も少くはない。本朝のことはさて置き、外國で例をとれば、クワリツヂ郷や、モンタニエーの如くその道で内外にその名を誦はれたものも少くない。然し彼等も時あればビツケル手挾んで山間逍遙に事かゝない山岳人でもあり、山を眺めるにつけても、獨り爐邊に火を樂しむにつけても山を想ひ、わけても山仲間を前にしては頬を赤らめてその山物語りに興ずる反芻性を最後まで強く保持してゐた人々であつた。實際上、山岳人でない山岳誌家は殆んど見出されない。それは丁度山岳人でない山岳圖書蒐集家が見出されないのと同じやうに。

幸福なことには手や足で山を攀ぢること丈けが山岳人の必要條件ではない。然し山岳會はヤングの所謂、『山を登る人のみではなく、凡そ山を歩き、或は山に就いて讀み、又は考へる人』の會である。そして山に就いて讀むことに關する限り何人もその材料に不足する心配のないことを、今回の展覽會が證明することが出来たならば充分その目的は達せられたといふ可きであらう。

札幌の冬と春

初見 一雄

札幌に住んでみていゝと思つた季節は冬である。第一スキーができていゝ、無理をすれば十一月の下旬から滑れる、スキーをやる人のためには實に有難い都會である。

街の西側を圍む山は僅に標高千米を上下するに過ぎないけれど、街の在り場所が十八米の高さであるから約千米の高度を上下する譯で、日曜日の散歩には手頃である。そしてこの都會にはスキーをやる人が實に澤山ゐて休日の札幌驛などは大變な人ごみになる。屈強な若者同志の一组、

中老組、老若相混つた組、親子組もあれば中には夫婦一組と云ふものもある。色とりどりの姿、誰でもが晴やかな顔付で明朗な空氣が邊りに漂ふ。

小學生にとつては楽しいスキー遠足の時節であつて一人の先生に率ゐられた何十人と云ふ小供達を圓山などに見受ける事がある。身の丈程もあるリュック、大人の用ふ程のストックをついてゐるものがあるから始終兩手が頭の上にあるものもある、小さい仲間では特に新しいスキーが巾をきかせる、札幌の先生はスキー迄も教へなければならぬから大變だらうと思ふ。

北海道と云ふとだれでもスキーが上手だと思ふかも知れないが、事實

は之と反對で上手な全く見とれる様な旨さを持つと云ふ人は少數で大部分は中位である。勿論下手な人は數限りなくゐるに違ひないがあまり目につかぬ、札幌に生れて札幌で育つて又札幌で死ぬと云ふ様な所謂土地つ子の中には實際うまいものがある。而し中には札幌で生れてそして育つた人でも未だスキーをやつた事がないと云ふものもあるから、土地つ子ですと云ふ口さきだけでは信用は出来ぬ。

大體に於て雪質が良いからスキーを廻はすのに餘り苦勞を要しない、身體のスキミングだけで廻る事もたまにはあるから關、赤倉に集る人達を實に氣の毒に思ふ。然しやぶのある點ではひけをとらぬ又樹の密に込んだ所も通る、だもんでどうしてもスキーを廻はさねばならぬ、先の見透しをつけ乍ら細くそして鋭く廻る必要がある、そして何よりも大切な事は轉ばないと云ふ事ともう一つは能ふ限り速く降ると云ふ事でスピードを樂しむのと同時に人を待たして迷惑をかけては申譯がない、絶対に轉ばないでそして速く降る事の出来る人達が普通に云つて上手な仲間に入るのだらうと思ふ。こゝの山岳部の先輩にNと呼ぶ人がゐて此の人は一シーズンに一回か二回しか轉ばなかつた相であるが而もそれが一シーズン百日以上も滑つてゐてそうなのであるから世の中には凄く旨いのであると感心してしまつた。

日曜日の散歩で一番いゝと思つたのは砥石と、そして奥手稻である。二つ乍ら千米を越へてはおらない人があまり来ないから静かであり、奥手稻から迷澤へかけてあの邊り一帯の針葉樹のまばらな林は大層美しい。大體こちらの針葉樹は内地のものより柄が大きいし枝ぶりも立派だから見てゐて豪壯な感じを受ける、月並みに言へば北の國と云ふ感じがヒシ／＼と身に迫る。静寂な氣分があたりを包む、陽がさしてゐれば長く影をひく、吹雪いてゐれば黒々と大きく動く、見て頼もしい、外に形容する言葉も見當らないが大概の人は好むに違ひないと思はれる場所である。ついでに書きそへると針葉樹林で立派に思はれるのは十勝のそれであらう。

頂から十勝川の源流を見下すとそこに鬱蒼と生へてゐる、まだ伐材の手が伸びてゐないから昔のまゝのが見へる、美事なもので恐らく北海道一ではないかと思ふ。

冬の札幌では時の経過が至極速やかである、そして總てが健康であつて楽しい。それが春になつて雪解けの時期になると少ししいやな思ひをしなければならぬ。いゝ事ばかりがそういつ迄も續くわけに行かぬから之も仕方がない。雪が解け初めると

街が先づよごれて来る。路が眞黒くなる、各家が石炭をたくから煤煙で大體がうすすぎたなくなつておる上に石炭の灰を皆が不精をして往來にすてる、雪が降つて其上を始終かくして仕舞つてゐる間は火に清潔に見へるがいき融け出すといけぬ。自動車、轍が深くえぐれて路は凸凹になる、それに黒い水がたまつて馬糞が漂ひ始める。煙突の煤が浮ぶ、泥炭地の名残りか、路に粘り氣が生じてひどくぬかる、ゴム長が必要になつてきて魚屋が澤山ある様に見へる一雨毎に段々と氣温が高くなつて下の地面が見へ始める而し山々は未だ白い、黒々とした林の影には粉雪もあらう。かう云ふ時季に一吹雪やつて来る事もあつて幼い者の登校姿を門口で見送る母親の愛ひげな顔をみる朝もある。青い顔をして急がしうに歩きまはるものがやたらに増へると學年末が近づくと、之は日本中どこへ行つても同じ事かも知れない。

春は露の臺から芽ぐむ筈であるが札幌では風が吹き始めるから大抵の鈍感なものにも感じられる。冬の間は西北から吹いてゐたのが其の逆になつて猛烈に吹く、上品に云へば鯉風普通に云ふと馬糞風と云ふ相である。風が吹くから路のぬかるみの乾きも早く文字通り乾燥した馬糞を飛ばす、灰も飛ばされゝば煤煙も塵埃もゴミになつて吹き運ばれる。空が黄色に見へる日が續く、どうして

患者が減少しないと云ふのも理由がある。カサ／＼と落葉を散らしたり塊りにしたりして街角を滑へて行く秋の風は眞に趣が深くて良いものだが春の風は第一生暖くて氣分が悪い悪い事はもう一つある。それはこの風の時期に鯉が澤山とれる事である澤山獲れる事は火に結構であるが従つて價格がぐん／＼安くなる、澤山あつて値段の安いものは先づ第一に下宿のお膳に上るは必定、之が我々を悩ますのである。先づ最初は鹽燗きになつて現はれる。これは一寸いけるからうつかり旨いなどと賞めて仕舞ふ、それがいけない、翌日から、鯉が續く、續いて續いていやになる程續くから幾ら魚には自信があると云ふ人でも大體まいるだらうと思ふ。家に歸へて来るや否や魚を焼く臭ひが鼻をつくとか又かと思ふ、そうすると目頭がなんとなく熱くなつてきて鼻の中に水が溜つてくる。東京の家の事がしきりに思ひ出されて来る。畑の肥料に迄する位だからこの鯉は實に莫大に獲れるらしい。日毎にお安くなつてゐるつて十錢で何十四となるに違ひない、ずつと以前に松本で百四十錢の鯉をしこたま買ひこんで神河内ですらい思ひをしたが正にこのことである。

札幌のお壽司はあまり旨くないから鮎が鯉ぐらひに獲れゝばいゝと皆が考へてゐる事だらう。風が吹くものだから咽喉が直ぐからからにかわく、直營のピアホール

が段々と繁盛しだす、而し我々學生は大びらには這入れぬ。外套の襟を立てたり、帽子をかきしたり、わざ／＼背廣に着換へたり仲々苦心を要する「札幌を有名にしたビール」マツチのレッテルにかゝり書いてある。どうでもいゝが不味いと云つた人はあまり聞かぬ。

附記、讀みかへしてみると喰ひ物の話が主になつてしまつた、大いに恐縮、恥入る次第である。随分と腹を立てる人も多いであらう。だが廣やかな海の様な心でお許しあれ。

冬・春の收穫より

去る冬期及び今春期に於て行はれた私達の登攀の中、主要なる收穫の概略を左に記します。

一、鹿島槍東尾根

(湯淺・山本・中島)

冬期に於ては一昨年と昨年の一月及び二月、何れも悪天候の爲に攻撃の機会さへも得られなかつた故、今年は一ヶ月間の準備をして入りました所、鹿島村から一ノ澤の頭に幕営した翌日、即ち十二月廿日簡単に宿望を果すことが出来ました。

降雪が少なかつた爲、例年の凄い雪庇は見られませんでした、尾根が細い上、岩場の邊りからは天候悪化の兆も見えたので、相當緊張した登高を致しました。

東尾根の唯一の惡場は此の二六〇

第三十週年紀念

山岳圖書展覽會について

○會期 五月三日—七日まで

午前九時より午後五時迄

○會場 日本橋丸善本店樓上

從來山岳に關する圖書は、初期の大會に於て、少し宛觀覽に供せられたが、山岳圖書を一定の期間を限つて公開の會場に陳列することは、今回が初めてである。洋書、和書集めて三百餘會所藏のもの外、數名の篤志會員からの出品も三分の二以上に達する。中には、マルテルの氷河文獻、シュラーギントワイトの四冊本などの稀觀本もあり、洋書は全世界の山岳を網羅し、和書は江戸時代以降、大正の初期までの山岳書が陳列される筈である。この展覽會の試みが、現代に於ける山岳文獻の水準向上に幾分なりとも寄與することゝなれば、我々の努力も無駄でなからうと信ずる。

解説付の出品圖書目錄は目下作成の巾。何卒萬障御繰合せ御來光あらんことを。

山岳圖書展覽會委員

○米附近の岩場で、從來、此の尾根を通つた人達は總て冷澤或は反對に荒澤側に避けて居ります。冬期に於きまして此の様なトラバースは危険なので私達は此の岩壁を直登する覺悟で居りましたが、今年の冷澤側のルンゼの雪は固く緊つて居り遂にそれに誘惑されて岩場を避け荒澤の頭に出でそして最後の急な細い雪稜を北槍に出ました。天幕から約五時間、全部輪標を利用しました。風は相變らず烈しく早速アイゼンに穿き代へて亂雪の中に鎖を眺めつゝ南槍を越え冷の小屋に入りました。

二十一日快晴の中を鹿島の村に下り、次で銀班のサポートに向ひましたが、冷澤の西俣では既に雪崩の痕跡を認めることが出来ました。

尙ほ後に東京商大、法政及び帝大の方々が同尾根を登られた様聞きましたが、二六〇〇米附近の岩場をどう處理されましたか？ 興味もつのは私達ばかりではないでせう。

二、銀の早月尾根登攀

(須賀・中牟田・人夫一名)

十二月廿二日バンバシマ着。二十三日の偵察により雪量が非常に少なく、バンバシマから一日で頂上を往復し得る確信を持ちました。

連日の雨も止み、廿四日眞夜十一時四十分小屋を後にしました。當日鹿島班の者が補けて来て呉れた爲殆ど空身で出發出来、且つ不成功の場合の根據地を設けること等をも頼め

たので此上もない好い條件の下に全精力を登攀に使ふことが出来之が實に成功の鍵であつたと思はれます。一七〇〇米位までクラストを利用して靴のまゝ、更に二六〇〇位までは輪標で一尺位のラッセルでした。

早月尾根の岩場は別山尾根と合ふ下あたりで一才細くなつて居り、惡場と云へば云はれますが、他は大したことなく、頂上まで十時間餘りでありました。

大日岳から東大谷の雪を吹上げる烈風は更に降雪を加へ、歸途は相當痛らくこたへましたが、夜來の腹痛と聯略の爲に途中から下つた中牟田及びサポート・パマテイに補けられつゝ、僅に六時間半で小屋へ降られました。我等は此のと同じ山頂を目指され大毎の竹節氏等と同行したことを附記して置きます。

早月尾根は唯天候が問題で、私達の時も終には全然登高に適さぬ状態になりましたが、以後はづうつと悪かつたらしく、確實に此の尾根を登る爲には天氣を逃さぬ登高システムを考へる事が肝要かと思ひます。

三、北岳バツトレス東北稜

(濱野・榎本)

根據地大樺小屋まで前年通り北澤から野呂川を下り、廣河原を經るルートを探り、大樺へ着いた翌十二月廿六日は偵察に過ぎました。

小屋前の草ズリを始め、大樺澤本流の左・右俣共概にデブリで埋つて

居りました。之は廿三日の雨で水分を含んだ春の様な全層雪崩でした。

私達はバツトレスの第四尾根(關西學聯Iによる)に登攀するつもりでありましたが、望見した所今年は非常に悪い状態にあり、一寸私達には手が出ないのを知りました。同尾根の兩側ともふんわりした粉雪で取付く所もなく、尾根自身も新雪の爲秋の經驗に懲して遂に次期に譲る外ないことを悟り、東北稜より北岳へ登高することに決心しました。

廿七日月光をたよりに五時小屋を出で、大樺澤右俣のデブリを登り、東北稜の末端の岩峰の後側に入るルンゼから取付きました。尾根へ着いてから初めは細く、そのラッセルも大變でありましたが高度を増すに従ひ幸ひ雪も緊つて來ました。マツチ箱と同高度邊りからルンゼをトラバースして左側の稜に出で、小太郎尾根の上部へ出ました。北岳頂上では未だ十時半でありました。兎に角苦勞したのは、尾根に取付いてから岩が現はれて來る所位までの極く僅かでありました。

頂上では猛烈な寒氣に追ひ返され草ズリを經て大樺小屋まで一時間とは費しませんでした。翌日サポつて廣河原までしか下らなかつたので、その次の日は雪が降り北澤へ歸るのに十八時間を要して終ひました。

第四尾根は長い期間を準備し、ガツチリ四つに組む心がまへが必要でせう。私達の様に第二次登山を持つ

様なことは禁物であります。そして真冬に於て全然不可能視するのは未だ早いと思ひます。

四、聖澤より聖岳・遠山川へ

(濱野・榎本・人夫一名)

北岳の登行を終り轉付峠を越えたのは一月四日。木賊を立ち構島から聖澤へ入つたのが六日でありました。木賊近く既に雪崩二、三箇所あり昨年と比較にならぬ程悪いし昨年甘回程の渡渉にこりて赤石澤から聖澤大タル下まで聖澤の左岸をワカンで捲きその狩小屋に泊りました。

七日大タル・小タルを左に大きく捲き、ナギ澤を上部で乗越して聖平の下、南澤附近で野營しました。天幕を携帶せず穴を掘つたのみであるが暖く寝られました。此日の行程は九時間でしたが雪が落附かず苦しいでした。八日聖平へ二時間餘スキーの欲しい丘をボク／＼歩く。九日森林帯を夏路通り登り、尾根が細くなつてからアイゼンに穿き替へ聖へ二時間の樂な登頂、野營地に歸つてから上河内岳へ森林帯をラッセルしましたが永く續いた天氣も遂に雪となり、易老への縦走も止め遠山川へ下りました。遠山川は雪も少く河原も廣く、明るい氣持で迎へてくれました。昨冬の敗退が報いられたのは何よりです。

五、鯉の小窓尾根登攀

(須賀・鈴木)

三月十九日池ノ谷班と共に小窓尾

根の末端に天幕を張りましたが、天候悪く二日の後バンバシマに歸りました。例年完全に埋る白萩川もここまで出て居り、橋三回、渡渉二回は一寸めんどろでした。

廿二日天候は回復したので天幕に入り、廿三日午前三時アイゼンのまゝ出發しました。小窓尾根の岩場は一九〇〇米邊りからですが、早月尾根から眺めた時感ずる程凄くはなく途中二三箇所の苦心で午後二時半には小窓の頭に立つことが出来ました。此の日私達は早稲田の友達と一緒に居ました。早大山岳部からも發表の機會もあることと思ひます。

六、クレオパトラ・ニードル

(須賀)

小窓尾根が早く出来てしまつたので、その足ですぐ夏の縦走路に従つて池ノ谷乗越へ出ました。三ノ窓へ向つて池ノ谷をトラバースする所はいつも大變悪い所でありましたが、今年は雪の状態がよく簡単に通過し得ました。

ニードルへは八峰の頭から下り、西北の面から登りました。ピトンは一二本しか持つてなかつたので、一度打つたのを抜いたり無理をして登つたつもりでしたが、何分小さな岩峰の事故、所要時間は一時間位であつた。降りには雪をかき岩に拾繩を利用しました。歸途は元來た通りですが、小窓で一夜ビバツクし、翌朝白萩川を、バンバシマへ歸りました。

七、鯉の池ノ谷登攀

(濱野・中山)

小窓のバアティと小窓尾根下へ天幕を張つて以來、三月一杯は谷歩きに悪い日が續きました。然し其の間の池の谷へ偵察に二回、小屋へ五回の往復をし、絶えず機會を覗ひつゝ體を働かせて居りました。

四月四日遂に出發に決し午前二時半アイゼンで天幕を出しました。池の谷の瀧は全部埋り、夏の幕營地まではスキーも使へます。それより上は谷全部の凄いい雪崩が出て居り兩側は氷壁です。二俣まで二時間を要しそこから右俣を鯉の頂上目指し谷通り登りました。夏の大きな瀧は埋つて居ましたが、氣味悪い割目がありました。頂上直下に着いたのが九時頃、最後は全く急斜で雪も氷化して居たため、ステツプ・カツテングを續けて頂上下廿米の尾根に出て、十一時十五分鯉岳に立しました。池の谷右俣より鯉への直登は私達の問題であつただけに、之を解決出来たことを私達は何よりの喜びとするものです。頂上で東大谷の班と再會、共にバンバシマへ下りました。頂上より四時間です。

八、鯉の東大谷登攀

(山本・榎本)

三月十九日以来四回の偵察行の後四月三日眞夜十一時いよ／＼バンバシマを出發しました。

東大谷は一六〇米位の所で二俣になつて居り、右俣は早月尾根の上部「カニの鉄」の所に、或は平藏のコレに出て、左俣は早月尾根の二六〇〇米位の所に出て居ります。私達はその右俣を早月の上部へ出ました雪の調子も中分なく恵れた發攀が出来ました。然し澤全部の非常に大きな層雪崩が出た新しい痕跡がありました。注意すべきものと思ひます。東大谷上部の岩は堅實なものでありましたが、前銀方面のそれは相當手強いらしいです。

Ph. Borchers
天 山 Kurt Luchs
ヒツラヤ、カラコラム Peter Auf
schneider 及び Paul Bauer
東及び中部アフリカ Oskar Erich
Meyer
ニュージーランド Marcel Kutz
アラスカ H. Baumgarten
コルデイラ E. Hein
中部チリ及アルゼンチン・アンドス
Albrecht Maass
然し之の丈の多くの地方の登攀史を僅々菊版三百頁のものに纏め要領のいゝものにしようとした結果が同時に此の本を著しく中途半端なものにしてしまつてゐることも議論の餘地がない。殊に地方別登攀史とすれば、まだ吾人の希望と隔ること程遠い。案内書でもあり乍ら索引もなく章の中の小見出しもなく甚だ便利でない。然も登攀史として感銘を受けるに足るは餘りに取扱ひ方が平坦である。のみならず地方によつては全くカッパアされて居ないものもある。例へば口繪に祭り上げてあるミニア・ゴンカールの如きその類である。記述も決して最近の所まで及んでゐない。ナンガ・バルバットは一九三二年で打ち切り、メルクルは他の場所では十字架つきたが、肝心の彼の終期は文章の上に出て来ない。ゴルブノフ、アボラコフ二人の登攀がピク・ガルモ(七四九五米)となつて居るの等も不精確である。ガルモは六六一五米で二人が登つたピク

圖書紹介

Der Kampf um die Welberge
Herausgegeben von Th. Herzog unter Mitarbeit fuerende
Bergsteiger.
Bruckmann, Muenchen, 1934
(21.5x13.5, pp 318)

世界の著名山塊の登攀史である。内容を最もよく物語るには目次と夫々の章の執筆擔當者とを擧げるのがよいと思ふが、何れにしてもドイツ登山界での夫々の權威を網羅した事は異論のない所であると思はれる。
W. Raechl

本會評議員藤島敏男氏は、日本銀行バリ出張員を命ぜられ四月二十五日龍田丸で横濱を出帆された。又彼等の地より度々面白い山の便りを送られ會報誌上を賑はすことであらう。

第六十六回小集會（關西）

四月十日午後七時より大坂堂ビル
清交社に於て別宮理事司會にて開催
左記講演をなし盛會なりし。

一、白頭山登山に就て（ポーラーシ
ステムと白頭山） 宮崎 武夫氏

一、白頭山登山準備に就て

長谷川清三郎氏

防災科學第二卷震災

[illegible]

山と溪	同	山と溪の會報
關東山岳會報	三月號	
やまびこ會報	同	
魚市場山岳會報	同	
戸畑山岳會報	同	
日比谷山岳會報	同	
白樺山岳會報	同	
山人會月報	同	
日本登高會報	同	
尾ゼの會報	同	
三峰會報	同	
みなかみ會報	四月號	
東京アマチュア山岳會報	同	
名古屋山岳會報	四月號	
臺灣山岳會報	同	
白馬登山會報	同	
廣島山岳會報	同	
東京登歩溪流會報	同	
がくれい會報	同	
東京市山岳部報	同	
明峰山岳會報	同	
姫路山岳會報	同	
武藏山岳會報	同	
神戸アマチュアスキ俱樂部報	創刊號	
Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpen-Vereins	1934	
The Geographical Journal March	1935	
會員寄贈圖書		
結城哀草果著	村里生活記	
中山山岳會報	創刊號	
山形高校山岳部報	第一	
以上	後藤幹次氏	

購入圖書

津輕半島突端龍飛岬の植物相
以上 村井三郎氏
臺灣次高山彙に於ける米河地形研
以上 鹿野忠雄氏

購入圖書

Th. Herzog: -Der Kampf um die
Weltberge 1935

に近頃、毎月會員諸君の御手許に
ける感ずる會報を見て、日本山岳會の會報
を振へずと多少でも御感じになら
りませんでしやうか、この點係とし
何とも申譯のないことでありまし
而し係と譯する、その原稿の依頼に
可成苦心してゐるものであります
に依頼の言葉も、依頼ありへた
は會を思つて下さる方は早速御
稿下さいませが、内を外れた鐵砲御
稿と同じ様に何等の響もなくなつて
まふのであります。その編輯の巧
す、原稿があつてからの話であり
頂かなければならぬので有ます
諸君からどしどし投稿下ささ
れば、如何程迄も内容の充實し
立派なものとする事も出来まし
諸君が日本山岳會の事を思ひ、わ
大會の發展を計る氣持があるなら
少しいち應答並びに山岳などの原
持で、御送り下さい。要するに會
互に親しむ事でありませう。今少し
と思ふのであります。

編　輯

昭和十年四月二十五日印刷
昭和十年四月二十八日發行

發行者 額田

編輯兼印刷者 逸見眞雄

東京市芝區琴

發行所 日本山岳會

電・芝・一六四力希

電話・四谷・六五四番

濃津美は山の用品

絶対の信頼と安心とを求め得る山の用品が
常に取揃へてございま
す。特にリツクサツク、
と山靴に就いては最も
完全を誇つて居ります。

ピッケル入荷

アルフレッドベンド。
エフ・シエンク。
ジーハメラー。
ウイリツシユ。
フリツチ。
アツテンホツハー。

濃津美

天地堂春の特価

中古格安品

一、ベビーコンタノバー六・三	四五・〇〇
一、同ノバー四・五	六〇・〇〇
一、インゴースフロントF四・五	五〇・〇〇
一、ドーリーカメラ四・五SプロントA	四八・〇〇
一、コリブリーカールC三・五	一五・五〇
一、同同S	一六・八〇
一、イーストマンベスト單玉	二一・〇〇
一、同セリウス三類KA七・五	二八・〇〇
一、ライカD型エルマー三・五	三四・〇〇
一、ライカDII型エルマー三・五	三六・五〇
一、ベビーアトムカールC四・五	一〇・〇〇
一、コレレカメラメーヤー三・五	七五・〇〇
一、ピコレットノバー六・三最新型S	六三・〇〇
一、回カールC四・五	九〇・〇〇
一、パレットツェイオン六・三	一九・〇〇
一、バルダツクスメーヤー四・五	六〇・〇〇
一、E Kセリウス三類KA六・三	三五・〇〇
一、バイオニア名刺カールC四・五新同	一三・〇〇
一、パテントエツエーカールC四・五	一三・〇〇
一、アイデア名刺トリナー六・三	一三・〇〇
一、キンカ名刺トリナー六・三	一九・〇〇
一、トキワカメラ名刺ヘリオス	二七・〇〇
一、ベビー名刺カールC四・五	一六・五〇
一、コレレカメラエルダー四・五S	九五・〇〇
一、ソホルフレツクス手札	二五・〇〇
一、Xプレス四・五	二五・〇〇
一、スビードレフ手札クスナー	九五・〇〇

◎中古品高價買入

◎交換特に歡迎致します

◎カメラレポート 毎月発行

町地馬番傳二谷十目丁三東

天地堂寫真器店

電話四谷三〇九三番
振替東京五二一八九番